

## 三次市総合教育会議（第1回）会議録

1 日 時 平成29年6月1日（木）  
開会：15時30分 閉会：17時05分

2 会 場 三次市役所本館6階 604会議室

### 3 出席構成員

市 長	増 田 和 俊
教 育 長	松 村 智 由
教育委員	小根森 直 子
教育委員	藤 原 博 已
教育委員	土 井 純 子
教育委員	深 水 顕 真

### 4 出席職員等

（教育委員会）

教 育 次 長	長 田 瑞 昭
事務局付課長	赤 木 実
学校教育課長	古 矢 俊 彦
文化と学びの課長	杉 原 達 也
文化と学びの課係長	國 原 佐知子
文化と学びの課主任	宮 西 美 裕

（事務局）

総 務 部 長	落 田 正 弘
秘書広報課長	矢 野 美由紀
秘書広報課係長	笹 岡 潔 史
秘書広報課主事	菅 原 琴 美

（傍聴者） 4人

## 5 議事

### ○平成29年度予算概要について

秘書広報課長 　ただ今から、「平成29年度第1回三次市総合教育会議」を開会する。総合教育会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第1条の4第6項の規定により、原則公開となっている。傍聴の申込みがあった場合は傍聴を許可することとされており、本日の会議について、申込みのあった4名に対し、傍聴及び写真撮影や録音を許可することとしてよろしいか。

構成員一同 　―異議なし―

秘書広報課長 　それではまず、開会にあたり増田市長よりごあいさつ申し上げます。

増田市長 　本日は、お忙しい中ご出席いただき感謝申し上げます。まず、チャレンジデー2017についての報告をさせていただきたい。参加率は、三次市56.6%、南さつま市66.7%であった。勝負で負けはしたが、昨年の35.8%を大きく上回る数字となり、大変なご協力をいただいたと思っている。

教育委員におかれては、教育の充実のために、日頃より様々な取組を学校現場と一体となり進めてもらっている。我々が最も関心を持つ学力の面については、国や県の学力試験の結果を見ても、努力をしていただいている結果が出ており、嬉しく思っている。現在、小・中学校が34校ある中で、問題が全くないとは言えないが、かつての時代と比べて学習やスポーツに打ち込める、落ちついた環境であると思う。広島県内における犯罪の認知件数について言えば、平成14年度が最大のピークであった。今年度は、その70%を超える削減をみているとのことで、平成10年代以降から穏やかな環境

になっているのではないかと思う。

総合教育会議の開催については、平成27年度に5回開催し、教育大綱を策定した。昨年度は2回開催し、予算に係る首長としての考え方と、教育委員会としての思いを情報共有させていただいたと思っている。

本日は第1回目の会議ということで、今年度の市政の方向性と教育に対する具体的な施策について、私の思いも加えお話ししたいと思う。

秘書広報課長 次第進行に入る前に、今年度第1回目の会議にあたり、教育委員及び職員の顔触れにも変更があるため、ご紹介をさせていただく。

一 紹 介 一

秘書広報課長 続いて、次第の「2.協議事項」に入る。これより会議進行は、議長である増田市長にお願いする。

増田市長 平成29年度の市政方針の中で、1番の柱に「生活最優先」を掲げている。あえてコンパクトにいうと、生活環境都市というイメージをもちながら柱立てをしている。

まず、その中で最も重点的に取り組むのが「子育て」と「教育」である。この2つを今までの蓄積に加えてやっていく。教育は人づくりであることは当然であるが、それに加えてまちづくりに大きく貢献することにつながる。子育ての面では、負担の軽減など多様なニーズに応えた様々な施策を展開している。これに教育を併せて取り組んでいくことで、いかに若い世代を定住させ、U・Iターンを含めた移住の促進をめざすか、ということを最大のテーマの一つとして取り組んでいきたい。予算的にもそのようにさせていただいた。

2つ目に、安心して住めるまちにするため、「医療」と「福祉」の分野にもしっかりと力をいれていく。三次市は、まだ

まだ地域包括ケアシステムを十分に確立しているとはいえない。ハード面・ソフト面を含めて、高齢者の方が安心して住めるように施策を展開していく。医療の面において、市立三次中央病院は、平成28年度も黒字経営で終えることができた。子どもたちの関わりでいえば小児救急を進めている。これは三次市にとっては大きな財産である。どの自治体も、1人でも小児科医を抱えていくことが大変な中、三次市には5名の小児科医がおり、産科医も5名いる。365日24時間すぐさま小児救急が対応できる状態というのは、子どもたちにとってとても大切なことである。この規模の市でこのように実現できているということは、医師を派遣してくださっている広島大学ほか、広島県関係機関に感謝したい。

3つ目に、上下水道を含めた「生活環境インフラ面の整備」を進めていく。高速道路が2本クロスしており、インターチェンジが5か所ある市は他には無く、大変恵まれている。それもあって、工業団地が完売しており、新たな取組をしていける。総観光客数については、一昨年が336万人で過去最多だったが、昨年は339万人余りとなり、過去最多を更新した。今年度に入り、4・5月の連休をみても、昨年度より更に増えている数値が確認できている。三次市に目的を持って訪ねていただけている。そういう面での一番懸念した点が、少しは払拭できたと思う。これから将来に向けた取組をしていく中で、更なる高みをめざしていきたい。それ以外の産業振興など様々なものがあるが、「住んでみたい、住み続けたいまち」を一番めざすべきであると考えている。

そして、2番目の柱は「5つの拠点創造プロジェクト」である。これは拠点性を活かし、将来へ向けてさらなる高みをめざした取組である。お手元の資料をご覧いただきたい。

1つ目の「(仮称)みよしアグリパーク整備事業」では、

酒屋エリアに100万人を超える集客を見込んでいる。現在、「トレッタみよし」と「森のポッケ」のところから、広域農道の整備が進んでいる。その交差点から1.5km行ったところに100ha近い丘陵地がある。その一角にピオーネ団地があり、そこを整備することで、農業と観光交流を一体化しながら人の定住をはかっていく。今年度は、プロジェクトチームを立ち上げて進めており、将来へ向けた、三次市あるいは広島県における拠点エリアである、ということを出していきたい。

2つ目は、市民委員会を立ち上げた「三次まるごと博物館事業」である。この事業では、三次町を中心とした未来再生・文化歴史の継承・三次市全体の活性化をめざしている。三次町はかつて、銀の道・出雲街道・舟運など宿場町としてにぎわいを持った町であった。それが、高度成長期の中で人口減少や大型店舗の参入によって衰退していった。この事業は、その頃のような賑わいをもった三次町を違う形で再生していくとする事業である。合併後には、石畳・電線の地中化・うだつのある風景事業・辻村寿三郎人形館などが整備され、それらを期待してチャレンジショップのみなさんが入ってこられた。かつてよりお店が増えてきている中で、このまま何もしないということは三次市としても禍根を残すことになると思う。市民ホールが移転することになる中で強い要望があり、平成23年から28団体60人を超える町民が組織する「考える会」を進めてきた。3年弱かけて一緒にやってきたことに少しアレンジを加えながら進めていく。また、この規模のまちで「日本」という冠をつけられる施設は、以前にもこれからにもあるだろうか考えた時、この事業は将来に向けて大きなインパクトを与えるのではないかと思う。

3つ目の、産業団地への企業誘致では、新たな模索を進め

ていこうと思っている。第3期では、ここ2年余りで7つの企業を誘致することができた。昨年12月には有効求人倍率が1.86であったが、今は1.54まで下がっている。いずれにせよ、かつて0.38～0.39くらいまで落ち込んだ三次市は、現在人手不足を招きつつある。それと相反することではあるが、将来に向けた雇用の拡大・充実をはかっていきたい。

4つ目は、八次中学校の山手にある（旧）広島県種鶏場跡地である。この7haは貴重な用途になる。この1年で議会や市民のみなさんとのコンセンサスを深めながら、近い将来に何をめざし、どう活かすのか決めていかななくてはならない。

5つ目は、県立中・高をオール三次でめざしていこうということである。これは7月の主要事業施策の要望活動にも入れながら展開していきたい。今一番、県北の地に企業が進出しており、教育の充実が求められる中で、選択肢を増やしていきたい。県立高校は三次市に3高あるが、将来にわたって県立高校を3高が守れるかというのは断言できない状況があると思う。三次市としては、将来へ向けて三次・青陵・日影館を守り、その地域の教育の拠点として高校の存続をめざしていきたい。そのためには、中高一貫教育は重要なことであると認識している。

3番目の柱は、「地域の拠点づくり」をめざしていこうということである。この1年で地域のめざす姿を明確にしていく。例えば三良坂では、三良坂駅前を中心とした整備事業を平成12年から進めている。国道184号の筋には、市と個人の保有地を含めて100区画をこえる宅地がある。これを売っていかなければならない。小・中学校のモデル校もあり、金融機関・買物・JR福塩線、そしてほとんどが無料区間である中国やまなみ街道の三良坂インターチェンジもある。こ

れから三良坂町の明るさをもった拠点づくりができていくのではないかと考えている。また、7月には住民のみなさんが85%株主になって進めていこうとする「郷の駅」が川西地域にオープンする。甲奴町も温泉を活かした健康増進施設を進めていこうとしている。決して市街地のみならず、周辺地域も含めて、拠点づくりをめざしていく。

そうした中、教育の方では他の自治体と比較しても重点的な取組をさせていただいていると考えている。教育は人づくりのみならず、まちづくりにつながるということを校長先生・教頭先生に本気で思ってもらうことによって、学校現場が大きく変わってくる。市立の学校に赴任された教職員のみなさんにも、三次市の職員であるという自覚をもっていただき、社会環境が極めて厳しい中でご無理を言うが、基礎学力の定着や知・徳・体の人間形成を含めて、しっかりと進めていただくようお願いしたい。人の配置においては、教育委員会の要請どおり、市費教員・学校支援員・障害児介助指導員・事務職員のトータル88名と、ALTを12名配置している。全員で100名である。それに加え、相談員の先生方であるが、長年学校でご尽力いただいた経験を生かして努力をしていただいている。大変ありがたいことである。こういった人の配置に関しては、教育委員会の意向を十分反映した中で行っており、県教委にも様々な要望活動の中で教育長とともに申し上げている。県下一であると自負しているので、ぜひ学校現場にも徹底していただきたい。

次に、耐震化についてである。みらさか学園の建築で、1年ほど古い校舎を残していたために平成26年に完結となっているが、実質平成25年度には耐震化が完結している。平成28年度でも目途の立たない自治体がある中で、財源の確保をしながら子どもの命を大事にすることに力を入れてきた

ということは、教育現場として頭に留めておいてほしい。

それから、空調設備の整備については、重い最終決断をさせていただいた。新築を併せ34校すべてに、平成28年度の予算で設置していく決断をしている。このことについては、学校現場と教育委員会の中で十分徹底をはかってもらい、夏に涼しくなって良かったというだけでなく、それを活かして行ってほしい。学校現場には、補習を含めて基礎・基本の徹底をしていただきたい。理解が十分でないまま、将来へ引きずっていく子どもたちを一人でも少なくしていくために、空調設備を十分に活かして頑張ってもらいたい。いろいろな事情があるかとは思いますが、高等学校を退学していかなければならないような事態を決して起こさないように、またそういった子どもを一人でも少なくしていくための努力に活かしてほしい。現在、それぞれ入札や工事に入ってきている。

広島県が「山・海・島体験活動」として、平成25年度から4年間実施してきた野外宿泊体験活動が今年度廃止となった。子どもたちにとって大事な取組であると思っていたので、極めて残念である。三次市では、独自の取組として「みよし版わくわく体験活動推進事業」を実施していく。ここに3泊4日の予算をつけた。学校ごとでどのようにアレンジされるかは分からないが、ぜひ「ふるさと教育」に連動させてもらいたい。若い人の農業離れが進んでいる中で、我々が反省すべき点は農業そのものを体験させていなかったことである。子どもを巻き込んで農業をしてこられたところは、今も子どもたちが中心となって農業をしている姿を目にする。体験させることの大切さをつくづく感じる。ふるさとには、それぞれの地域で頑張っておられる土壌がある。農業や林業における昔ながらの伝統の継承も、後継者がいなければその歴史が閉じてきてしまう。それを含めて、ふるさとの良さを体験さ



せる取組で将来につなげてもらいたい。例をあげると、三次独自の取組である高校生の「キャリア育成事業」が3年目を迎える。これは、三次で頑張っている企業のみなさんに午前中プレゼンをしてもらい、午後から企業訪問をするという取組である。三次市でバスをチャーターし3高校の2年生全員を送迎している。三次の企業の良さを見て体験してもらうことで、高校を卒業してすぐさま残るという選択ばかりではなく、大学卒業後あるいは他の場所で会社勤めをしていく中で、ふるさとに思いを持ってもらうことをめざした事業である。このような、ふるさとを体験していくという取組をぜひ積極的にやっていってほしい。

次に、「特色ある学校づくり」ということであるが、この取組に約1千万円の予算を充てている。まさに今申し上げた通りのことである。どのような特色ある教育をしていくのか、学校を挙げてしっかり検討して取り組んでいただきたい。真剣度のある姿勢であれば、来年度以降の予算増額については、決してやぶさかではない。これまでの慣例、あるいは一般的な授業の中で特色ある教育を推進していくという授業ではなく、ぜひとも積極的に我が学校としての取組をしてもらいたい。これについては、他の予算を削ってでも増やしていきたい大切な事業であると考えているので、ぜひ真剣に考え、積極的な取組をご検討いただきたい。

最後になるが、三次市が三次で生まれ育つすべての子どもたちを全力で応援していこうという「三次市子どもの未来応援宣言」は、この年内をめどに宣言を策定すべく委員会も立ち上げていきたい。この宣言を基軸として、三次市が更なる努力をし、三次で育ってよかったと思えるように、乳児から高校生までの子どもたちを全面的に応援していきたい。そもそもこの取組は、貧困に伴う経済格差の中で、将来への大き

な格差が生じてくるということに焦点を絞りながら進めてきた。行政としては、そのことも当然大切にしながら、すべての子どもたちを将来に向けて育ていける「一人ひとりを大切にしたまち」としての役割を果たしていくべきであると思う。今年度、応援宣言を策定し、来年度にはこの宣言文を基にした子どもたちへの施策の充実をはかっていきたいと思っている。教育委員会としても、ぜひよろしくお願ひしたい。

松村教育長 今年度、第1回目の総合教育会議を迎えた。主要には今年度の予算・施策を教育に関わってお話をいただき、この1年間の方向性、または次年度へ向けての課題をしっかりと持ちながら進んでいく、一つのきっかけとしていただくものでもある。平成27年に新しい教育委員会制度が始まり、その制度に基づいて行っている。これまでの教育委員長というものはなくなって、教育長が1人と教育委員が4人という体制となり、三次市長から任命をいただいて教育に携わらせていただいている。また、平成27年12月には三次市の教育大綱を一緒に策定させていただいた。この時にも教育は人づくりであり、まちづくりの基盤であるということを中心に据えながら行ってきた。その際にも市長から、次世代を担う子どもたちが夢と希望を抱いて、健やかに成長できるまちづくりを実現させてやりたい、ということ強く言っていただいた。平成29年度を迎え、本市を取り巻く厳しい社会情勢の中、予算においても教育の方に多くのお力添えをいただいている。他の市町からも、なぜ三次市はここまで教育に予算を投じていただけるのかと聞かれるほど、県内では群を抜いて子どもたちの力をつけていくための予算をしっかりとつけていただいている。これも、すべての子どもたちの夢・志を実現するための「三次市こども未来応援宣言」に相通じるものである。

まず、学校の耐震化についてであるが、県内23市町ある中、平成28年7月の時点では11の市町が完結しており、これは全体の47.8%であった。平成29年3月の段階では、終了予定を加えても全体の60.8%である。本市においては、早い段階で耐震化を進めるとともに、先ほど市長のお話にもあったが、教育環境の整備ということで空調の整備もご決断をいただいたところである。これについては各学校長も、つけていただくものに対してどのような取組をするか、それは何のためかをしっかりと考えながら、市の方へも考えを伝えてきた。長期休業中であっても、自宅でなかなか勉強をみてもらえない子どもたちも多いのが実情であるが、ある中学校では、部活に来た後の暑い時間帯に、自分の自学のための勉強を先生にみてもらえるチャンスにも使っていきたいと校長が語っていた。このように、それぞれの家庭環境を顧みながら、学習環境を活かして子どもたちの学力を高め、夢・志の実現につなげていこうとしている。

また「ふるさと教育」については、生まれ育った地域の事を知ることによって、将来この三次に帰ってきてしっかりと地域を担っていこうという子どもたちが、一人でも多く育ってくれればと思っている。これまで県が行ってきた「山・海・島体験活動」は昨年度で終了したが、三次市で重要性を感じていただき「みよし版わくわく体験活動推進事業」という名前になって予算をいただいている。これこそ三次市内を中心に体験活動をすることで、ふるさと教育につなげていこうというものである。学校が決断をすれば3泊4日というのは可能である。

「特色ある学校づくり」では、各学校の計画に対して審査し、1千万円分の予算を各学校へ配分していくこととなる。例えば、学校周辺を活用して自然体験を進めていきたいとか、

地域の方との交流を深めていくための活動を進めていきたいなど、いろいろなことを通してすべて体験であり、生きる力・学力に結びついていく。これについても、それぞれの学校が年を追うごとに深い方向性をもって語っている。つい最近もある学校長から、すでに平成30年度に向けてどのような方向性をもってやっていくかという話を、職員の中で進めているとも聞いた。先ほども市長から、本気であれば来年度また予算についても考えても良いとのお話もいただいた。より良い環境の中で、生きる力や学力をつけ、夢・志を実現できるような子どもたちにしていただけるよう、学校とも協議を続けていきたいと考えている。

三次市では、小学校1年生からの外国語活動を進めてきたが、その中にイングリッシュキャンプ等ALTを使っている活動がある。昨年より始まった「がんばる中学生の英語学習応援事業」では、英検1級から3級の受験に100%の補助をしていただいた。今年度はそれに加え、支援を4級までひろげていただいた。受験しやすい状況になることで、1年生の段階から子どもたちがチャレンジする意欲を持って取り組むことができる。国際化がどんどん進んでいく中で、自分の最低限のコミュニケーションが英語でもできるというところにつながっていければと思っている。

また、三次にある奥田元宋・小由女美術館など4つの美術館や、地元にあるプラネタリウム・観光農園など市内にある施設を「みよし版わくわく体験活動推進事業」で利用していくことも考えている。

増田市長 追加で1点申し上げたい。今お話にあった英検の支援についてだが、英語を小学校1年生から体験させることをぜひ学校に徹底してもらいたい。昨年度は大変立派であった。中学

校3年生で2級の取得など、予想していたよりも遥か上をいっており大変立派であると感じた。そういう意味でも4級に支援を広げたことについては、学校側が何もしていないということにはならないようお願いしたい。

それでは、教育委員から、お一人ずつご意見等をいただきたいと思う。

小根森委員 市長のお話の中で、いつもながら教育に対する熱い思いや言葉をいただき、大変重く受け止めている。

先日、教育委員会の学校訪問に同行して各学校を回らせてもらったが、全体的に落ち着いている印象であった。特に中学校は、良い雰囲気では学んでいると思う。小学校1・2年生は、少し落ち着かないところも見られたが、そのところで保・幼・小の連携の重大性を感じた。県教委の資料に「スターティングカリキュラム」というものがある。幼稚園や保育所から小学校にあがるときに、このカリキュラムをしっかりと連携してやっていくということが大変注目されている。年に1・2回の訪問だけではなく、月に1回くらいは幼稚園や保育所と小学校が連携できたら良いのではないかと思う。

「みよし版わくわく体験活動推進事業」については、大変ありがたいと思っている。今回の新学習指導要領のキーワードのひとつにも「社会に拓かれた教育課程」というものがある。社会の中で3泊4日を過ごすことは、三次の地域を知り、歴史を知り、自然を知ることができる。これには大きな効力があると思う。小規模の学校は、他校と連携して合同で行っている。これをきっかけとして、食育も併せてしていただけたらと思う。

英語についても、手厚い予算をいただいております、学校側も感謝するとともに色々頑張って取り組んでおられる。英検を受けることによって、実用英語に対して芽が開いていく。日

本の英語教育では「書く」だけが目標に達しており「読む・聞く・話す」ができていないということが、テレビなどでも言われている。これをきっかけとして、子どもたちが「使える英語」を習得することにつながると期待している。

また、「特色ある学校づくり」について、学校側と事務局が一緒になって一生懸命考えていると感じる。とても良い雰囲気である。

これからは、複式教育・へき地教育に力を入れてやっていくべきだと考える。地域の方が「複式いいじゃない」と安心して任せられるような教育ができるようにしていきたい。

それから、最近の子どもたちを見ていて自己肯定感が少ないと感じる。市の方でも子どもたちの出番をしっかりと作っていただいて、あらゆる場面でボランティア等に参加させてもらえたら、子どもたちに自信ができるのではないかと思う。

また、「ぐんぐん教員・支援員」では、校長先生方が感謝しておられる。連合会に出ても、教員の確保が難しくなっているという話を聞く。教員に限らず、そこに教員以外の人を配置する柔軟な対応も、今後は必要なのではないかと感じている。いずれにしても、三次市は教育に力を入れており、学校側もそれにこたえるべく努力している。

今回予算をつけていただいた中に「教育シンポジウムの委員会」というのがあるが、これは教育と社会をつなぐ一つのシンポジウムだと思っている。ぜひたくさんの方の市民の方に参加していただき、これがひとつのつながりの象徴になれば良いと思う。

土井委員　私が予算をつけていただいて一番うれしく思うのは、「みよし版わくわく体験活動推進事業」である。私事であるが、孫がこの活動に初めて参加した際に、作木の小学校の子どもたちとカヌー公園で1泊の交流することができた。それが大

変印象に残っているようで、「〇〇君は今なにしよるかな」とポツンと言うことがある。学校訪問の際には、布野・作木・君田の3校が3泊で実施しようとする話が進んでいると聞き、大変うれしく感じた。小学校の頃から、このような交流を通してお互いを知ることによって、大きな事を言えば、子どもたちが大きくなった時、「これがやりたいがどうだろうか。作木には〇〇君がいるし、君田には〇〇君がいるから話をしてみようか」といった繋がりができる。そこまで大きくななくても、高校へ行ったときに小さい時を知っている友達がいる。そんなつながりをもって、学習に取り組むことができるということは、大変ありがたいことであると感じる。それに答えるだけの取組を、各学校で考えていただきたいと強く思う。

「ジュニアアスリート育成事業」では、一流アスリートの方を招いて、子どもたちに走ることの素晴らしさや、泳ぐことの力強さを目の前で感じさせることができればうれしく思う。

「森のポッケ」については、親の方がもっと子どもに遊ばせたいと思うような施設であるという声を耳にする。もっと安ければさらに良く、大人の料金を三次市民であれば100円にしてほしいという話も聞いた。また、三次中央病院に小児科の先生が常勤されている。このような環境の中で子育てがしたいと思わせるような市になってきていると思う。財政が厳しい中で、教育に力を入れていただいているということは大変ありがたい。貧困で子どもたちの将来が左右されることのないように、との考えを基本において進めていただいていることも、大変うれしく感じている。

藤原委員 市の取組に関しては、今年度も他の市町にない予算をいただいております。子どもたちに英語や環境の整備をしていただいている。そんな環境の中で、子どもたちは今以上にすくすく

と育ち、元気はもちろん学力アップにもプラスになっていくと思う。

「みよし版わくわく体験活動推進事業」においては、子どもたちにぜひ積極的に参加して、三次の中の色々な所に行ってみてほしい。毎年小学校で田植えの授業をさせてもらっているが、子どもたちに「家に田んぼがある子」と聞くと手が上がる。しかし、「田植えをしたことがある子」となると、ほとんど手が上がらないというのが現状である。そもそも、子どもたちの親に田植えをやっていないという人が多い。各学校やそれぞれの地区でやっていただいているという話も聞いているが、子どもたちには農業に触れ合うということを見せてやりたい。

「子ども文化芸術ふれあい事業」では、美術館や博物館等に足を運んで本物を見て、子どものときにしか感じられないものを感じてもらいたい。このような事業に対して、できれば全校が手をあげて積極的にやっていただきたいと思う。

また、空調設備で環境を整備していただいた中で、すべての子どもたちに夢を持ってほしいと願っている。いつも子どもたちに、「夢は大きいほど良いが、夢を叶えるための小さな目標を10個作りなさい」と言っている。その1つ1つの小さな目標は叶えていけると思う。1つずつ達成して近づいていく、ということが大切であると考えている。

深水委員

A L Tが12名いるということで、英語というのは三次市の売りになっていくだろうと思う。私自身が子どもの時代には、外国のお客さんを前にすると一歩引いて親の後ろに隠れるといったところがあったが、私の子どもの世代では一歩前に出て手を出す感覚がある。これは、学校で子どもたちがA L Tの先生とのコミュニケーションを行ってきた、一つの成果であると思う。ぜひもっとA L Tの先生を増やして行って



もらえるありがたい。また、先ほど小根森委員からも話があった「会話」というところで、例えばインターネットを活用して外国の方にメールを出してみるであるとか、好きな外国のタレントにファンレターを出してみるといった活用方法もあるのではないかと思っている。

この度、教育委員になって3か所の学校訪問をしたが、いくつか気になったことがある。1つはメディアリテラシーについてである。ある学校でSNSの調査をやっているという話があったが、今の時代は子どもたちがインターネットのゲーム内で待ち合わせをしたり、つながったりしている世代である。そういった、ゲーム機の中のネットでつながるということを、校長先生が知らなかったりする。子どもに対して、インターネットの危険さや怖さの教育はされていると思うが、逆に教員に対してインターネットでこんなことができるとか、こういった可能性があるといった、深さや面白さを伝える研修というのをぜひやっていただきたい。例えば、夜中に子どもたちが布団の中で外国の人とゲームをやっていたりする可能性があるわけである。そういったことも、ぜひ先生方に伝えていきたい。

また、各学校が特色化に取り組んで、研究発表や色々な活動の内容を掲示しておられた。これを学校の中だけではなく、三次市全体で共有できる場を作っていただきたいと思う。例えば、市民ホールの大ホールなどで各学校の代表者がプレゼンをして、お互いを評価し合うプレゼン大会のようなものがあったら良いのではないかと思う。

このように、いろんなことをやってほしいと思う気持ちはあるが、それとともに一つ心配なのが、先生方の負担にもなってくるということである。新しいイベントをするにしても、それに手を挙げるかどうかという話になってくる。そう

いった意味で、これからは職場環境の省力化にも取り組んでいただきたい。先生方のドキュメントワークをできるだけ省力化していく中で、子どもに向けてチャンスの与えられる時間を作っていただきたい。また、教員自身の時間を作ってあげることも大切であると思う。

増田市長

お話を受けて少し紹介であるが、「ジュニアアスリート育成支援事業」には力を入れてきている。5月から広島の子サッカーチーム「アンジュヴィオレ」と提携して、中学生・高校生を対象に、月に2回コーチを呼んでサッカーを教えるという新しい事業を始めている。この事業から一定の補助を出し、サッカー協会の会長と一緒に指導層を作って指導してもらっている。

「みよし版わくわく体験活動推進事業」については、何年から何年までの事業ということではなく、ぜひこれからも継続してもらいたい。

「森のポッケ」は、今までほとんど使われていなかった施設を子どもに特化した施設にするという、県下では他にない取組であった。料金については、危険のない人数に制限をする一つの手段としてそのようにしている面もある。

松村教育長

それぞれ貴重なご意見をいただいた。続きはぜひ、教育委員会会議でお話いただきたいと思う。深水議員の、英語についてのお話では、現在スカイプを使った学習をやっている学校もあるので、それに加えて手紙を出すやりとりというのは、大変おもしろそうなお話であると思う。藤原議員の、体験をさせることと、夢を叶える小さな目標をもたせ、一步一步スモールステップで進んでいくというお話は、もっと詳しく深くお伺いしたいと感じた。土井委員からは、「みよし版わくわく体験活動推進事業」で3校合同というお話があった。3つの学校がそれぞれの町を回っていくということは、子ど

もたちにとって思い出に残る大変良い体験になるのではないかと思う。小根森委員からは、複式教育についてのお話をいただいたが、学校が増えてきたときに、複式学級の指導の仕方も教員にとっては大切な技術であると思う。加えて、複式教育でも力がつくということ子どもたちが実感し、保護者の方にも理解していただけるようにしていきたい。現在考えているのは、すばらしい指導力をもった市内の複式学級の先生の授業をビデオに撮り、それを基に各学校で研究を進めるというものである。単式の学級であっても、複式のやり方は効果が期待できると考えている。

増田市長 深水議員のお話にあった、「特色ある学校づくり」の情報共有については、何らかの形で共有するのも大切なことであると考えているので、検討したいと思う。

秘書広報課長 それでは、事務局から連絡事項を申し上げる。次回の総合教育会議については、年度途中で特段会議を開く必要がない限り、予算編成時期に平成30年度予算についての会議の開催を考えている。また、その時期になれば教育委員会から事務局へ予算等の要望を伝えていただければと思うが、それまでに皆さまからご要望がある場合には、教育委員会にお伝えいただければと思う。以上をもって、平成29年度第1回総合教育会議を閉会する。